

喜劇映画の日土比較： 『男はつらいよ』と『うっかりシャキル』

A Comparative Study of Japanese and Turkish Comedy Films : *Otoko-wa Tsurai-yo* (*It's Tough Being a Man*) and *Sakar Şakir* (*Clumsy Sakir*)

藤田 晃代
Akiyo Fujita

序

山田洋次 (1931-) 監督、渥美清 (1928-1996) 主演で人気シリーズ映画となった『男はつらいよ』(1969年初回作) とトルコを代表する喜劇俳優ケマル・スナル (Kemal Sunal, 1944-2000) がうっかり者の主人公シャキル (Şakir) を演じた、ナトゥク・バイタン (Natuk Baytan, 1925-1986) 監督による人気コメディ映画『うっかりシャキル』(*Sakar Şakir*, 1977)⁽¹⁾ はいずれも日土両国を代表する喜劇映画作品であるが、その内容は互いにあまり知られていない。それにもかかわらず両作品には物語構成、登場人物像などで共通点が見られる。今回は『男はつらいよ』『うっかりシャキル』両作品に描かれる各登場人物の人間関係をもとに前回に続いて呼称の比較分析を行なう。分析にあたって『男はつらいよ』に関してはシリーズ映画の「原型」が提示される初回作を扱うこととする。また前回の論文では1970年代にトルコで大人気を博した学園コメディ映画 *Hababam Sınıfı* (邦題は拙訳で『やんちゃ組』とした) シリーズに於けるトルコ語呼称を英語字幕の訳と比較分析したが、⁽²⁾ 本論では日土両語の呼称を比較分析する際、筆者の第一言語 (母語) である日本語に主観が傾きすぎないように、日本語とトルコ語の比較に際してときに定点を英語に置いて行なう。そのため必要に応じて英語の呼称にも言及する。また、トルコ語およびトルコ文化を尊重する観点から初出のトルコ語には原語表記を付けるが、『うっかりシャキル』の台詞引用は以下、すべて筆者によるトルコ語からの拙訳とする。なお、本論では日土比較文化を扱いつつトルコ映画文化の紹介も兼ねているため、『うっかりシャキル』の分析および言及に比重があることをおことわりしておきたい。また、分析にあたっては論旨が煩雑になるのを避けるため、付属情報はすべて註釈に記すこととした。

I. 物語的共通点

i. 両作品に於ける旅モチーフと物語の舞台

『男はつらいよ』と『うっかりシャキル』にはいくつかの共通点が見られる。共通点として、両作品とも男性主人公の帰り（帰郷）、周囲の人間との関わり、そして出立が物語の中心的な構成になっている点があげられる。まず『男はつらいよ』では冒頭の有名な口上にもある東京の下町、葛飾柴又が物語の舞台として人々に示される。「フーテンの寅さん」こと車寅次郎による口上でも繰り返される葛飾柴又と帝釈天、さらに寅次郎の叔父と叔母夫婦が経営する「とらや」といったそれぞれの場所は、そこに生きる人々と主人公を結びつけるための強固な機能を果たしており、寅次郎にとってかけがえのない居場所となっている。一方、『うっかりシャキル』はトルコ中部のアナトリア地方にある小都市カイセリ (Kayseri)⁽³⁾ から伯父の遺産を相続するためにイスタンブールにやってきた主人公シャキルがイスタンブールの下町で繰り広げる一連のコメディである。カイセリ時代のシャキルには肉親がいる様子はない。また、甥に遺産を相続させる富豪の伯父ハサン (Hasan) をのぞけば後述する遺産横領を企てる叔父叔母夫婦のハジ (Haci) とファトマ (Fatma)⁽⁴⁾ 以外に親戚もない。それでもイスタンブールに到来してからのシャキルは地域の住人に溶け込み、やがて下町の「人気者」となる。『男はつらいよ』の葛飾柴又が物語の舞台として同作品を象徴する場所であるのに対し、『うっかりシャキル』の場合、イスタンブールの下町が舞台であるという点は場面からは伺えるものの、特に具体的な地名の言及はない。そのため場所の特定が難しいのだが、画面に登場するトルコ国鉄 (TCDD) の列車とその沿線、さらにマルマラ海 (Marmara Denizi)⁽⁵⁾ へと続く栈橋の場面からイスタンブールのヨーロッパ側、観光エリアから若干離れた旧市街、マルマラ海側近辺⁽⁶⁾ であろう「推測」はできる。もっともこれはあくまでロケの場面であるから撮影場所はすべてストーリーの舞台に一致するという断定は困難と言わざるを得ない。また『うっかりシャキル』では地区の中心部のベデステン (Bedesten)⁽⁷⁾ にチャイハネ (トルコ式茶屋) があり、シャキルをはじめ街の人々が集まり交流する場となっている。このベデステンは、単純比較はできないものの『男はつらいよ』に於ける帝釈天同様、地域を象徴する場として機能していると思われる。このように見るとベデステンとチャイハネのある風景を持つ『うっかりシャキル』の舞台はいうなればイスタン

ブルの「典型的な」下町という型（タイプ）をモチーフにしたものといえるだろう。いずれにしても両作品とも主人公の旅をモチーフとしつつ、主人公と下町の人々との関係性が物語の下地にあるといえる。

ii. 人物構成の共通点と相違点

『男はつらいよ』の車寅次郎と『うっかりシャキル』のシャキルはともに旅をする主人公であるが二人とも本来は人の好い性格で情に厚く、周囲の人々と騒動を巻き起こしながらもやがて和解する点では人物像が共通している。また、両作品は他の主要な登場人物構成においても大枠が共通している。『男はつらいよ』では寅次郎の叔父叔母夫婦と妹のさくら、印刷会社従業員で後にさくらの夫となる博、さらにタク社長、御前様とその娘、源公、舎弟のノボルなど主人公の周囲はきょうだい親戚と柴又を拠点とした人々で占められている。『うっかりシャキル』では叔父叔母夫婦のハジとファトマ、ハサンがシャキルに残したマンションに住むファト（Fuat）とセウダ（Sevda）、同じくマンションの住人で自作テレビにこだわる自称アナウンサー、さらにベデステンにあるチャイハネの主人や酒呑みで知られる通称「海将」、信心深いサブリ（Sabri）翁も含めた街の人々などいずれも個性的な人物が主人公と関わりながら物語を展開していく。次にそれぞれの作品の構成及び登場人物と主人公の関係を見ていく。

まず、すでに述べたように、両作品とも主人公と他の登場人物との衝突と和解というモチーフが見られる。『男はつらいよ』では寅次郎は妹さくらの結婚をめぐって印刷会社従業員の博とケンカをする。さくらと博の結婚をはなから受け入れられない寅次郎は他の従業員も巻き込む大騒ぎを起こしたうえに博と一対一で対決する。そこで博の境遇を知った寅次郎は博と和解、一転してさくらとの結婚を認める。博は父親に猛反発して家を飛び出して勤務をしている身だが寅次郎も父親と大ゲンカの挙句家を飛び出して放浪していたのであるから二人の境遇の近さが互いの共感呼び和解に結び付いたと考えられる。『うっかりシャキル』ではカイセリ発イスタンブール行きの長距離バス⁽⁸⁾ 車内でたまたま隣り合わせとなったシャキルとファトがトラブルをきっかけに大騒動を起こす。騒動はファトが座席に置いた帽子の上にシャキルがうっかり座ってしまったことから始まる。以下は序盤の長距離バス車内の場面からの引用である。

ファト：「帽子から、どけ」

シャキル：「あ、これキミの？」

シャキルは初対面の相手にも物怖じしない話し方をする。トルコ語の二人称には丁寧形のsizとぞんざい形のsenがあり、初対面の相手であれば丁寧形でまずは話すのが通常だが、シャキルはいきなりぞんざい形で話しかける。ここではsenを「キミ」と訳したが、シャキルの話し方がなれなれしく聞こえてしまい、かえってファトをイライラさせてしまう。機嫌が悪そうな様子のファトにシャキルは続けて話しかける。

シャキル：「キミ、何だか元気ないね」

「もしかしてお金ないの」

「よければイスタンブールに着いたら貸すよ」

実はこのセリフの前にシャキルはバスに遅れて乗ってきたことを他の乗客たちに詫びた直後、怪しい者ではないことを周囲に伝えようと「皆さん安心してください。僕お金持ちですから」と述べている。その身なり、振る舞いと言葉が一致しないことがファトに不信感を抱かせていたのだ。相変わらず二人称のぞんざい形で話しかけるシャキルに対しファトはますます不機嫌になっていき、シャキルがお土産に持参したヨーグルトがファトにこぼれてかかったことからバス中を巻き込んだ騒動がはじまる。この時点ではお互いの関係がまだ何もわからなかったものの、二人の騒動はイスタンブール到着後も続く。しかし物語の最終場面でシャキルがファトの命を救い二人は和解し「義兄弟」となる。うっかり者の相続人シャキルと後述するように服役し、出所したばかりというファトは立場の違いを超えて、正直すぎる生来の性質が一致していたゆえに騒動も起こしたが和解にもつながったと言える。シャキルは自分ではそれとは意識しないままいろいろやらすことで周囲の人間を騒動に巻き込む。ファトはシャキルとは比べものにならないほど「厄介なヤツ」といわれる人物だが、シャキルが言うように「ときどきやらかしてしまうけれど本当はいいヤツ」であり、二人とも生き方がときに不器用であるものの正直な点では根を同じくしていると考えられる。

両作品に於ける人物像の共通点は女性登場人物にも見られる。『男はつらいよ』のさくらは東京丸の内の会社でキーバンチャーとして働いており、自分の生活を叔父と叔母に頼り切らないことを旨としているという点で自立した女性といえる。『うっかりシャキル』のセウダは仕事をしながら夫ファトを養っている。昼間に仕事に行き帰宅が深夜近いセウダの様子から

は音楽バー勤務が予想されるが、二人とも状況は異なっても職業を持つ女性という点では共通している。また、二人とも主人公の振る舞いによって他の人間との関係がダメになった（された）経験を持つ。さくらは勤務先の会社の上司を通じて執り行われたお見合いの席での寅次郎の下品な言動がもとで断られてしまい、セウダはシャキルによるマンションの部屋への侵入事案（実はハジの差し金）を機にファトとの関係にひびが入る。このように互いに接点がないと思われる日土両作品には人物像や人物構成において複数の共通する要素があることがうかがえる。

とはいえ、本来別作品であるから当然相違点もある。「とらや」を切り盛りする叔父（おいちゃん）と叔母（おばちゃん）はさくらの親代わりを務め、寅次郎が何か起こすたびに厳しい非難の言葉こそ投げかけるが、けっして見捨てることなく根底ではいつも寅次郎を受け入れる情愛を持っている。一方『うっかりシャキル』に登場する叔父叔母夫婦のハジとファトマはシャキルが相続するはずの遺産の横領を企てるために親切を装って彼を迎え入れながら様々な画策をする。前述したようにシャキルには精神的支えとなる家族や親戚もいない。かといって彼はけっして孤立無援なのではなくイスタンブールの街にすぐに溶け込み、ベデステンに集う人々ともすぐに打ち解けて下町の仲間となる。シャキルのおごり高ぶらない性格がそれを可能にしているといえるが、寅次郎が柴又を基点に親族や周囲の人と関係を築いていくのに対しシャキルは街の人々を次々と仲間にしていくことでイスタンブールの下町に根づいていく。『男はつらいよ』と『うっかりシャキル』には主人公が街に根づくそのプロセスと登場人物に関して相違点はあるにしても主人公と街との関わりおよび主人公が周囲の人々と展開していく物語構成については大枠に於いて共通点のほうが目立っていると言える。

II. 呼称の日土比較

i. 主人公に対する呼称の比較

両作品に見られる呼称を考察するにあたって、まずは日本語の呼称に関する捉え方から論じる。平出正嗣氏は日本語の呼称に関して「日本は個の社会ではなく、和の社会であり、人はその集団における自分の位置と役割を自覚し、その役割を演じようとする」⁽⁹⁾と述べ、さらに日本語の呼称の特徴として「日本語では人間の上下関係、および内・外関係を基本に、性別や立場や状況に応じて多様に変わる。まず身分・年齢などが上の者に

対しては（中略）自分とどういう関係にあるかに応じて（中略）常に敬称を用いる」⁽¹⁰⁾と論じている。年齢の長幼，内か外か，親しい間柄かそうでないかによる呼称の変化とその多様性は『男はつらいよ』の主人公，車寅次郎に対する呼称を見ても明らかである。試しに寅次郎に対する呼称を挙げると以下のようになる。

寅次郎，寅さん，寅ちゃん，寅，お兄ちゃん，兄さん，兄貴，お前，あんた

「寅さんシリーズ」に馴染みのある者であれば呼称を見ただけで誰が主人公に呼びかけているのかすぐに想像がつくだろう。一方で『うっかりシャキル』に於けるシャキルへの呼びかけは以下である。（原語表記の後の日本語訳は筆者による拙訳である。直訳しにくい語はできるだけ日本語訳になじむ訳を付けた。）

Şakir（シャキル），abi（兄さん），abiciğim（お兄ちゃん，兄貴），oğlum（お前），kardeşim（きょうだい），arkadaşım（わが友），canım（愛しい人），yavrum（お前，キミ），sen（あんた，キミ，お前）⁽¹¹⁾

トルコ語と日本語の呼称は必ずしも一対一に対応しているわけではないため，訳しにくい呼称もあるが，人が置かれた立場や状況によって呼称が変わる点は日本語と変わらないことがわかる。状況や関係性によって呼称が変わるのは何も日本語に限ったことではなく，個人を重視するといわれる英語の呼称との比較にあっては日本語の呼称が特徴として際立つだけと言ってもよいかもしれない。トルコ語の呼称も実際に多様である。日英語の比較も重要だがそのことが日本語の「特殊性」を故意に強調する目的に特化してしまう可能性もあることを指摘しつつ，日土両語の呼称の比較をすすめていく。

日土両言語とも多様な呼称を持つが，既述したように日本語にそのまま訳しにくいものもある。『うっかりシャキル』に類出するoğlumは英訳するとmy sonあるいはmy boyの意味だがトルコ語のそれは自身の息子に対してだけでなく心的に近い年下の男性相手にも使われる。この点に関していえば「下の者，あるいは同等の者に対しては，相手の名前を呼び捨てにする」⁽¹²⁾日本語とは対照的である。日本語の場合「そうすることで，距離をなくし，いわば相手を裸にして，こちらが遠慮なく話せる相手にする」⁽¹³⁾とのことだがトルコ語の場合，下の者に対して用いる呼称が存在し，それ

らを使うことで話し手が相手をどうとらえているかが明らかになり、明らかになることで距離が近くなるもの考えられる。同様にyavrumも用いられるが、こちらは相手の性別を問わずに使える呼称である。⁽¹⁴⁾ 英訳するとmy childないしmy darlingが一番近いだろうか。日本語には対応する語がないため「お前」または「キミ」とするしかないが、同様に使われるcanımは英語のmy dearが最も近い。ここに挙げたトルコ語の呼称はいずれも日本語に訳しにくいものだが『うっかりシャキル』ではしばし用いられている。まずは冒頭の場面から引用する。場面はハサンの家、二階の寝室では体が弱ったハサンがベッドに横たわっており、様子を見に来たハジとファトマが階上へ行く場面である。

ハジ：「どうだ、ハサンは、もうダメか」

看護師：「いえ、まだ大丈夫です」

ハジ：「何でダメじゃないんだ」

看護師：「私に言われても」

ハジ：「ダメじゃなきゃダメだ」

この時点でハジもファトマも遺産がもらえるものと思込んでいる。富豪の親戚から遺産をもらうことに必死になっていることは冒頭の台詞から容易に想像がつく。看護師を振り切ってハジとファトマは意気揚々と二階に行く。二人が入ってきたことにハサンが気付いた場面を引用するが、以降の台詞の訳では日本語にしにくい呼称を別の語で置き換えた箇所はすべて下線を記す。

ファトマ：「あら、だいぶよさそうだこと」

ハサン：（弱々しく）「私は間もなく旅立つ。そこで話がある」

ハジとファトマ（枕元に近づいて）：「はいはい」

ファトマの台詞は原語では“Canım.”という呼びかけから始まっている。訳しにくい間投詞にしたが、このcanımは本来、心を掛ける相手に呼びかける際に用いられるはずである。いち早く遺産が欲しい二人にとってハサンがこれ以上生きながらえるのは「都合が悪い」。そのためファトマが発するこの呼称と続く言葉は、一見ハサンに向けた表現でありながら彼女の嫌味と本心が読める表現となっている。さらに遺産は本来の正当な相続人であるシャキルに渡ることが直後にハサンから直接伝えられ、ハジが詰め寄ってもハサンは二人に遺産を渡す意思など一切ないと伝えた時点でこの呼称は明らかなアイロニーとなる。以上見てきたように日本語同様ト

ルコ語も呼称は多様だが、必ずしも互いに一対一で対応するわけではなく、しばし日本語呼称に置き換えにくいものでもあり、ときにアイロニーとして機能していることがわかる。

ii. 夫婦間呼称の日土比較

『男はつらいよ』では「とらや」の叔父叔母夫婦は互いを「お前」、「お前さん」、「あんた」と呼ぶ。さくらは博を結婚前は「博さん」と呼び結婚後は「あなた」と呼ぶが結婚後の博はさくらを「さくら」と一貫して名で呼ぶ。また『男はつらいよ』に於ける夫婦間呼称では妻が夫の名を呼び捨てる場面はみられない。これは平出氏も指摘する「家父長制の名残り」⁽¹⁵⁾に由来するものと考えられるが日本語に於ける夫婦間呼称についてはしばし非対称的な関係を認識せざるをえない。この夫婦間呼称に関して次に論じるが、トルコ語には日本語には見られない独特の呼称が存在する。夫から妻への呼称、hanım（丁寧形は hanımefendi）、karım そして妻から夫に対する efendiと kocam（親称は kocacığım）である。家父長制の強いトルコ社会にあって言語に於いては夫婦間呼称が存在する点でいえばトルコ語の呼称はむしろ対称性を保っていると言えよう。とはいえ言語的にはそうであるが『うっかりシャキル』ではハジがファトマを名で呼ぶことはしばしあってもその逆はない。ファトマはハジを敬称のefendiを繰り返し用いて呼ぶ。次の場面はシャキルがやってきて、もともとハサンが所有経営していたバックル（雑貨店）⁽¹⁶⁾は自分のものだと言った直後、ハジはファトマに店を任せて近所の水タバコ店⁽¹⁷⁾に出かけており、そこへファトマが駆けつける。

ファトマ：「お前さん、お前さん、大変だよ」

ハジ：「どうした、火事か」

ファトマ：「来たよ、あの甥が」

「今、店を乗っ取ったよ」

ハジ：「え？そりゃ大変だ」

水タバコ店の外テラスにいるハジを見つけてファトマが呼びかける場面だが原語では“Efendi.”という呼びかけが二度繰り返される。このefendiも日本語に対応する語がないため「お前さん」としたが、ちょうど『男はつらいよ』で寅次郎の叔母が自分の夫を時に「お前さん」と呼ぶのと同様、比較的年配の妻が同様に年配の夫に用いる表現とも考えられる。この呼称

は英語でいうところのSirであるはずだが、efendiの訳語としては日本語の「お前さん」のほうがここではよりニュアンスに近いものと言えるだろう。

ファトマがハジに対して呼称を使う回数はその逆の場合よりも圧倒的に多い。確かにハジもファトマを呼称で呼ぶことはあるが、hanımは一度しか使わず、あとは“Karım.”と呼ぶ。この語は妻を意味するkarıに相当する語に所有接尾辞をつけたもので、英語でいうmy wifeの意味だがハジの使うトルコ語のそれは古い英語の呼びかけでladyに対してさげすんだ言い方とされるwomanに近いものがある。次は遺産横領のための書類偽造工作がうまくいかないことをファトマに責められたハジがある手段を伝える場面である。

ファトマ：「もう、他に方法ないよ」

ハジ：「ある」

ファトマ：「何が？」

ハジ：「まったく、わかってないな」

「サインがダメなら拇印だよ、拇印」（自分の親指を突き付ける仕草をする）

ハジの台詞、「まったく、わかってないな」の冒頭、原語には“Karım.”というファトマへの呼びかけがある。対応する日本語の呼称がないために「まったく」と言い換えてみたがここでハジはただ責め立てるだけのファトマを疎ましく感じており、さげすみの意味をこめてkarımを使っている。このように見るとトルコ語には夫婦間呼称が存在するがハジとファトマの互いの呼称使用を分析すると二人の非対称的な関係が表現されていることがわかる。

次にファトとセウダの場合を考える。ファトはセウダを呼ぶとき常に名前前で呼ぶがセウダは自分の夫を呼ぶとき親しみを表現する接尾辞に所有接尾辞をさらに加えた⁽¹⁸⁾ “Kocacığım.” という敬称で呼ぶ。英語に直訳するとmy dear husbandと重くなってしまうため、あえて日本語にすると「夫ちゃん」というニュアンスだろう。もっともこのように呼ぶケースがあるとしてのことだが、ファトとセウダの場合もハジとファトマ同様、呼称に関しては非対称的な関係にある。しかし、セウダがファトを名前前で呼ぶ場面がある。一つは前述のようにシャキルがマンションに侵入した直後の場面である。シャキルに気づいたファトは長距離バス内での大騒動もあって深夜にもかかわらず逃げるシャキルを追いかける。すごい勢いで飛び出し

ていった夫に向かってセウダは「ファト、どこ行くの?」と名前で呼ぶ。もう一つはセウダとファトの寝室の衣装ケースに隠れたシャキルがケースごと部屋から逃げていく場面である。シャキルと二人きりで室内にいたことを伏せたいセウダは夫の問いかけにはシラを切る。ぼう然とするファトにセウダは声をかける。

セウダ:「ファト、どうしたの?ファト」

ファト:「セウダ、見たろ、あれ」

セウダ:「何を?」

ファト:「今、ケースが出て行ったよな」

セウダ:「いいえ、夢じゃないの、ファト」

「何もないけど」

ファト:「オレ、どうかしたのか」(頭を抱えてふらつき始める)

ファトとセウダの関係も本来非対称的だが、ファトの身に何らかの事態が起こった場合に限ってこの非対称性は一時的に解消される点が注目される。このように見るとトルコ語には日本語には存在しない夫婦間呼称が存在するがそれらは発話時の状況に依存する場合が多く相対的なものであることがうかがえる。

iii. 日本語に対応するトルコ語呼称, 対応しない呼称

これまで見てきたように日土両語には多様な人物呼称が存在するが一對一に対応する語はそれほど多くはないといえる。一方で親族呼称の場合、比較的なじみやすいためか共通する呼称が多い。「お父さん」「お母さん」はそのままトルコ語でbaba, anneとなるし、既述のように「お兄さん」はabi, 「お姉さん」はablaと対応する語を持ち、amca, teyzeはそれぞれ親族の叔父叔母に対して使う。またこれらの呼称は親族だけでなく年上の他人に対して使われる点も共通している。もっとも近年では日本語で見知らぬ相手に「お父さん」「お母さん」ましてや「おじさん」「おばさん」と話しかけると、場合によっては失礼になることもあるため、こと客相手の場面などでは避けられる傾向もあるが、トルコ語のそれらはまだまだ広く使われるようである。『うっかりシャキル』では他人に親族呼称を使う場面が複数見られる。シャキルがマンションに住む自称アナウンサーに呼びかける際には「アナウンサーのおじさん」を意味する“Spiker Amca.”⁽¹⁹⁾と職業名を付けて呼ぶ。他者に対して親族呼称を使うのはこの風変りな年

上の他人を相手にして距離を置きつつ機嫌を損ねないように最大限配慮した言い方といえるだろう。シャキルと会って間もないころ、前述の酒呑み「海将」はじめ街の男たちは彼を“Abi.”「兄さん」と呼んだが、これはまだ完全に親しくはなっていない相手に対する親しみと一定の距離とのバランスを保った表現であろう。さらに「海将」が店番をしているファトマに“Fatma Anne.”と呼びかける場面があるが、ここでは二人の年齢差を考えると直訳して「ファトマ母さん」というよりも「ファトマ姐さん」としたほうが日本語呼称としてなじむと思われる。またサブリ翁はしばしチャイハネに集う街の男たちから“Sabri Baba.”と呼ばれるが、これは既述のように年上の他人に親しみを込めて使う日本語の「お父さん」と同じものと言えよう。もっとも本論では「サブリ翁」と配役としてよりなじみやすい表現にして言及したが、いずれにしても親族呼称は日土両語に共通する傾向があると言える。また日本語呼称にはないがトルコ語の呼称の特徴として所有接尾辞を付けることでより相手との距離を近くすることができる点がある。この所有接尾辞つき呼称の問題を次に見ていく。

シャキルはハジを呼ぶ際にトルコ語で叔父を表す *amca* に親しみを込めた接尾辞に加えて一人称の所有接尾辞を付けた形“*Amcacığım.*”を使う。英語に直訳すると *my dear uncle* でやはり重い感じがするため、『男はつらいよ』でおなじみの「おじちゃん」ないし「おいちゃん」のほうが心的距離の近さを表すためニュアンスが近いと思われる。もっとも『男はつらいよ』の主人公、車寅次郎を迎え入れる「とらや」の叔父叔母と異なり『うっかりシャキル』の場合、叔父叔母夫婦ははじめからシャキルの遺産横領目的があって親切を装って受け入れているため、ハジのたくらみを知っている観客ないし視聴者にはこの呼称がアイロニカルに響く。シャキルがハジの策略に嵌められようとする場面を見る。

シャキル：「おじさん、店の掃除終わりました」

「今夜はどこに泊まったらいいでしょうか」

ハジ：「ここは俺たちの家だ」

「お前はマンションに行け」

「今から案内するから」

ハジのたくらみによってこの後シャキルはファトとセウダの住む部屋に送り込まれてしまうのだが、ハジのたくらみはファトを使って侵入したシャキルを手につけさせるものである。その時には当然セウダも巻き添え

となるだろうが家賃を滞納している二人ともさっさと追い出して早く別の住人を住ませたいと計算するハジの悪党ぶりがうかがえる場面である。何も知らないシャキルはハジを繰り返し“Amcacığım.”と呼ぶところが皮肉である。また原語の「お前はマンションに行け」というところにもあるようにハジはシャキルをしばし“Oğlum.”と呼んでいる。本来「息子」の意である語oğluに所有接尾辞を付けたこの呼称は前述の通り対応する日本語呼称がないため直訳はしなかったが、息子でない相手に対しても心的な近さを表す呼びかけに使われる所有接尾辞付きのこの呼称⁽²⁰⁾がシャキルとハジの間で用いられることはすでに述べた通り、ときにアイロニーとなり、本来、心的な近さを表すゆえに親切を装う相手の本心を隠す意味で両義的なものにもなる。

トルコ語における所有接尾辞付きの呼称は話し手が相手を自分の側にひきつけて巻き込む効果をもたらす。これは両義的な意味で相手に対する心的な距離が近くなっている証にもなる。次にあげる場面は前述の長距離バスでイスタンブールまで移動中の箇所である。シャキルとファトがバス内で騒ぎを起こした直後のドライブインではファトがシャキルに詰め寄る。

ファト：「おい、お前いい加減にしろ」

「いいか、俺は半年前にムシヨ出たばかりだ」⁽²¹⁾

「からむなら他のヤツにしな」

「わかってるよな、おい」

原語ではシャキルに絡むファトは繰り返し kardeşim という呼称を用いている。きょうだいを表す単語 kardeş に所有接尾辞を付けたこの語はそのまま「きょうだい」という日本語呼称に置き換えることも可能ではあるが、日本語のそれが多くの場合、仲間意識を表現したものになる傾向があるのに対し、トルコ語のそれは両義的なニュアンスを持つと言える。したがってこの場面では訳しにくいことから「おい」という呼びかけ表現にしたが所有接尾辞付きのトルコ語呼称がときに両義的な意味を持つことはすでに述べたcanım⁽²²⁾も同様である。家賃の督促にハジがセウダのもとを訪れた場面を見てみる。

セウダ：「何か用？」

ハジ：「あのう、ツケがだいぶありまして」

「つきましてはとりあえず三か月分の、」

セウダ：「ファトが来たら払うからその時に、お願い」

セウダのしたたかさを知っているハジは相手の出方をうかがっている。ここではセウダがハジをとりあえず追いつくために「お願い」するのだが、原語ではcanımと呼びかけている。すでに言及したこの呼称は「心」「命」を表すトルコ語canに一人称単数の所有接尾辞がついたものである。英語にはもちろんのこと日本語にも存在しないトルコ語の所有接尾辞は相手呼びながら自分の存在を添えたうえで自分側に相手をひきつけ、巻き込む性質があると考えられる。

ここまで日本語の呼称と対応するトルコ語呼称、対応しない呼称をそれぞれ見てきたが、最後にシャキルとファトの和解の場面からトルコ語に於いて人称を言及するケースを見てみる。場面はマルマラ海の栈橋、シャキルを追い詰めたファトが勢い余って海に転落、すんでのところまでシャキルに助けられた直後、ファトはこれまでの行いを詫げる。

ファト：「許してくれ。俺は悪い人間だった」

「お前、俺を助けてくれるなんて」

日本語同様、トルコ語も状況から明らかな場合は主語を省くのが一般的であり、とくに人称代名詞の主格は動詞語尾や所有接尾辞の形から判断できるために省略される。主格の人称を取って用いる場合は強調する場合であり、ファトの言葉は主語を省いていない。これはシャキルと自分の関係性を強調したものである。原語では「俺」は一人称単数の主格 ben、「お前」はsenが用いられている。トルコ語のbenとsenはともに韻を踏んでおり、このことは一人称と二人称は別個の人格を持っていながらごく近い存在、互いに近くでつながっている存在として認識されていることを表している。このことから「(一人称と二人称)両者の融合や入れ替えが容易に起こることがある」⁽²³⁾日本語とは異なるが、一方でトルコ語は「個」を持ちながらも、その「個」は英語圏をはじめとしたヨーロッパの文化圏にしばしば見られるような「他者」との緊張関係を極度なまでにもたすものではなく、むしろ互いの存在に依拠、相手とのつながりを基盤としてつないでいく関係と言えるのではないか。敢えて述べるなら“輪の文化”に基づいている関係と呼ぶに相応しいだろう。『うっかりシャキル』ではファトもシャキルとともにベダステンの仲間の輪に入っていく。その姿はまるではじめから街の仲間として根付いていたかのように、かつてのように厄介者扱いされていた様子はみられなくなっている。

結

日本とトルコをそれぞれ代表する喜劇映画作品『男はつらいよ』と『うっかりシャキル』について呼称を比較検証してきた。日本語、トルコ語ともに多数の呼称があるが、それらは必ずしも一致しないため、日本語には訳しきれない呼称が存在する半面、親族呼称にはある一定の共通する使われ方も見られた。またトルコ語には日本語にはない夫婦間呼称があり、夫婦間呼称自体は対称的であるが、ときに相対的に使われることもわかった。映画作品について述べると、『男はつらいよ』同様『うっかりシャキル』にも生来の悪人は登場しない。悪党ぶりが目立つハジもそのふるまいや言動にはユーモラスなところが多々あり、ファトマやセウダも然りである。ファトマも最後は改心しイスタンブールの下町に住む仲間として受け入れられる。そして何とんでも主人公のシャキルが飄々と生きていく姿が印象的である。『男はつらいよ』が主人公車寅次郎を演じた渥美清の死までシリーズ化していったのに対し『うっかりシャキル』はシリーズ化こそしなかったが、情に厚く、ときにやさしや失敗、そして騒動を繰り返しながらも憎めないユーモラスな三枚目キャラクターはケマル・スナルの「定番役」として他の映画作品にも受け継がれていく。⁽²⁴⁾ 多くの世界遺産を有し、観光や豊かな食文化で世界中から注目されるトルコのもう一つの主要文化である映画文化産業⁽²⁵⁾ にさらなるスポットライトをあてることは日土相互理解のうえで重要な意義を持っていると言えよう。

(2023年2月に発生したトルコ南東部およびシリア大地震で被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。そしてなによりも犠牲になられた方々に心より哀悼の意を表します。)

註

- (1) *Sakar Şakir Türk Filmi | 4K ULTRA HD*, Kemal Sunal Filmleri ve Sahneleri. 2023年4月配信開始。https://www.youtube.com/watch (2023年5月31日閲覧)。邦題は筆者による拙訳とする。なお、本文中でも言及した通り、引用の台詞はすべて筆者による拙訳であるが

直訳しにくい表現は意訳し、特に対応する語がない呼称を言い換えた箇所には下線を付けた。また、言語的には膠着語に属し、日本語、トルコ語ともにその語順はほとんど同じであるため特に必要がない場合、語順は変えずにそのままにして訳したが、台詞の訳であることを考慮し、簡潔な表現を心がけた。

- (2) 藤田晃代「英語字幕の可能性とその限界—トルコ娯楽映画からの考察—」, 埼玉工業大学工学部基礎教育センター教養紀要第40号(2022), 2023年3月。(拙論で取り上げた映画タイトルに一部誤植があったことをお詫びして訂正いたします。*Hababam Sınıfı* シリーズ第二作は、正しくは *Hababam Sınıfı Sınıfta Kaldı* です。)
- (3) 中央アナトリア地方にある都市カイセリは世界遺産カッパドキア (Kapadokya) 観光をする際の移動拠点となる都市として知られ、街の中心部にある城壁と時計塔は街のシンボルとなっている。またその食文化も有名で『うっかりシャキル』に於いてシャキルがお土産として持参するヨーグルトはカイセリ名物である。また、同じくケマル・スナルが出演する『村から街へ』 (*Köyden İndim Şehire*, 1974年, 邦題は筆者による拙訳) ではカイセリ名物のサラミ (パストラミ) が登場する。同作は畑から掘り出された金貨をめぐるきょうだい間の「攻防」を扱ったコメディ映画だが、撮影は主に首都のアンカラ (Ankara) で行われた。
- (4) 本作では主人公シャキルを演じるケマル・スナルは冒頭に登場する富豪ハサンと二役を演じている。この一人二役はシャキルとハサンがごく近い血縁関係にあることを特に印象付けるものとなる。ハジを演じるアリ・シェン (Ali Şen, 1918-1989) はトルコを代表する俳優であり、ケマル・スナルと複数の作品で共演している。前回の拙論の註釈で言及した『顔が広い男』 (*Yüz Numaralı Adam*, 1977年, 邦題は筆者による拙訳) では二人は親子として共演した。(なお、同作品の邦題の拙訳について、その後の学習においてトルコ語で「数」を表す *numara* は多義語であるため、原語のタイトルは複数の意味があることがわかった。「数」の他に「トリック」「見せかけ」という意味もあり、必ずしも日本語の「顔が広い」のようないい意味合いではなくむしろ「八方美人」的なニュアンスを含むものと思われる。) アリ・シェンの息子、シェネル・シェン (Şener Şen, 1941-) も俳優

であり、こちらにもまたケマル・スナルと共演作を持つ。前回の拙論で論じた『やんちゃ組』シリーズでは第二作以降体育教師役で出演、その熱血且つコミカルなアクションを繰り返す演技は定評となった。後述するケマル・スナル同様、シェネル・シェンの演技の幅も広く、シリアス役として主役を務めた作品も多く持つ。またファトマ役は『やんちゃ組』シリーズで寮母ハフィゼ（Hafize）を演じたアディレ・ナシット（Adile Naşit, 1930-1987）であり、アリ・シェン、シェネル・シェンともにアディレ・ナシットとの共演作も多い。なお、『うっかりシャキル』で遺産横領を企むハジの名は、もとは「巡礼」を意味し、そこから転じて「正しい道を行く」という意で使われるのだが、これがこの作品ではアイロニーとなっている。結末は明かさないが、ハジは思わぬ形で報いを受けることとなる。

- (5) イスタンブール市の南側に広がるマルマラ海は観光名所のトプカプ宮殿のテラスはじめ市の高台からも見下ろすことができる。2014年に開通したボスポラス海峡海底地下鉄マルマライ（Marmaray）はマルマラ海の“Marmara”と鉄道を表す“ray”を組み合わせた「かばん語」である。カイセリにも市電（tramvay）があり、こちらも市名と鉄道を組み合わせたかばん語のカイセライ（Kayseray）と名付けられている。
- (6) 旧市街、マルマラ海側周辺は近年、整備開発がすすんでいるようだがイスタンブールの下町風景として70年代の複数の映画作品に登場する。
- (7) 街の中心地を表す表現はベデステンの他にも複数あり、中心地の呼び名はメイダン（meydan）やセントゥルム（centrum）など都市や地区ごとに異なる。なお、イスタンブールの新市街側にある広場として観光客にも知られるタクシム広場は Taksim Meydanı である。
- (8) トルコでは全土で長距離バスが発達しており、重要な移動手段の一つとなっている。『うっかりシャキル』に於けるカイセリ―イスタンブール路線は複数のバス会社が乗り入れるなど主要な長距離バス路線の一つである。各地にはオトガル（otogar）と呼ばれるバスターミナルがあり、各地のオトガルから乗降可能である。なお、作中に登場するイスタンブールの到着バスターミナルは現在稼働しているヨーロッパ側ターミナル移転前のものである。

- (9) 平出正嗣, 『英語と日本語の深層を探る (下) : 品詞を比較する』, 開拓社, 2021年, p.113。
- (10) 平出, p.112。
- (11) 前回の拙論でも論じたように,トルコ語には名詞の語尾に付けて所有先を示す所有接尾辞が存在する。ここでは一人称単数の所有接尾辞 [-m] を付けることで相手との心的な近さを表現している。なお,トルコ語には母音を調和させて語調を整える母音調和があるため,例えば語尾が子音で終わる can (トルコ語の[c] は[j] 音になる) に所有接尾辞を付ける場合は母音調和に応じて canım となり, 母音 [-ı]が挟まれる。これは子音同士が連続しないように母音介入が行われるためである。本論で挙げた他の呼称のうち, 語尾が子音の単語に所有接尾辞を付ける場合, または他の人称の所有接尾辞を同様に子音で終わる単語に付ける場合も母音を介入させる。母音調和はここでは深入りしないが外国語起源の語をのぞいてトルコ語では連続させることのできる母音には「組み合わせ制限」があるというものである。なお, 所有接尾辞については, 所有元は何も人とは限らず, 上記のタクシム広場を表すトルコ語 Taksim Meydanı の meydan に付いた語尾 [-ı] は三人称単数の所有接尾辞である。厳密に言えば「タクシム (地名) の広場」という意味である。タクシム広場から続く繁華街として有名なイスティクラール通りのistiklal は「独立」を意味し, 「独立の通り」İstiklal Caddesi だが, 通りを表すcadde に所有元の三人称単数istiklal の所有接尾辞が付いている。[-si] とあるように[s]の音が入るのは母音同士の連続を避けるための子音介入である。トルコ語の子音介入現象については日本語話者であれば「春雨」や「村雨」というときにharu-şame, mura-şameと子音の[-s]を入れることを思えば理解しやすいであろう。母音調和, 所有接尾辞ともにトルコ語学習に於いて学習者が必ず基本として押さえなければならない文法事項であるが例外はごく少なく法則が明確なため繰り返し覚えれば使いやすい。
- (12) 平出, p.112。
- (13) 平出, p.112。
- (14) 子どもをはじめ年下の相手に対して使えるこのトルコ語の呼称は, 相手の性別だけでなく固有名詞を明らかにすることなく使える点で

も便利である。呼称とジェンダーの問題に関しては今回特に詳しく触れてこなかったが、瀬地山角氏はその著書『炎上CMでよみとくジェンダー論』（2020年初版、2021年第4刷）において、日本語の「さん」に代表されるように「日本語には敬称でMr. とMs. を区別しません。より正確にいうと性別を区別せずに敬称を使うことができます」（209）とその「便利さ」に言及している。同様に「先生」も性別を意識せず使える敬称であるが、トルコ語で「先生」を表す呼称hocaも性別を意識しない点では同様である。トルコ語の yavrum のように年下の者に対する性別を区別しない呼称は日本語には存在しないが、言語体系に組み込まれた呼称とジェンダーに関しては改めて議論の余地が十分にあるだろう。

- (15) 平出, p.113。
- (16) バッカル (bakkal) は食料品や日用品を扱う個人商店でスーパーマーケットとならんで街中によく見られる。スーパーマーケットチェーンが広まった今日でも近所のバッカルで日常的に買い物をする人は多いようである。
- (17) トルコをはじめ中東でよく用いられる加熱沸騰式タバコのこと。フッカの他、シーシャ、ナルギレなどとも呼ばれる。また、フッカはルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-1898) の『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) に於けるジョン・テニエル (John Tenniel, 1820-1914) による挿絵のなかで水タバコを吸うイモムシの場面にも登場する。
- (18) 人名の後に親しみを表す -cik, -cık, -cuk, cük または -çik, -çık, -çuk, -çük などを付けたうえて所有接尾辞を付けることができる。前回の拙論に於いて説明が十分でなかった点を補足する。この親しみを表す接辞は直前にくる母音によって音変化する。
- (19) 日本語でも主に子どもが相手の職業に親族呼称を付けて「八百屋のおじさん」や「店員のお姉さん」などという場合があるがそれに近い呼称と考えられる。なお spiker はトルコ語でアナウンサーの意味だが、綴りから類推できるようにこれは英語の speaker に由来する語である。英語由来の単語はトルコ語の呼称にも存在し、きょうだいや同胞を表す birader も元の語をたどると brother である。また日本語がそうであるようにトルコ語もトルコ語本来の言葉と外国語起

源の単語が併存する場合がみられ、例えば「俳優」を表す語は英語由来の aktör/aktris 以外に従来の oyuncu/kadın oyuncu も使われる。外国語由来の語を普段どの程度使うかに関しては、その人の教育や世代、言葉に対する考え方などさまざまな背景があるため論じると長くなるので詳細には述べないが、英語をはじめとする外国語由来の単語の中には元の語で広く一般的に使用される本来の意味やニュアンスと異なって使われる語もあるため注意が必要である。例えば pinch から来た pinti はトルコ語では通常「吝嗇」の意味合いで使われ、スキーの滑降コース（ピスト）を表す piste から来た pist といえはトルコ語では航空機の滑走路（runway）の意味でも使われる。また tampon は車のバンパー（bumper）の意味である。もっと身近な例では pasta という語は焼き菓子をはじめケーキ類を指し、本来のパスタを指す語は makarna である。さらにこれは元をたどればギリシア語源となるが、トルコ語の fizik は物理学（physics）と体格（physique）両方を表す語となっている。流入の段階で何らかの混同が起こったものと考えられるが『やんちゃ組』第一作ではこの語が洒落となって使われる場面がある。物語の序盤、いつも難しい物理学の授業を今日こそはサボりたいと願う生徒たちは担当の先生をそそのかして文字通り担いで教室内を駆け回って騒ぐ。騒ぎに気づいて駆け付け「授業は、物理（fizik）ですよ」と問う生活指導のマフムート先生（Mahmut Hoca）に対し物理担当教師は「授業は体（fizik）が基本です」と答える。原語でなければ洒落にならない場面である。

- (20) 既述の通り昨年の拙論で取り上げた『やんちゃ組』シリーズに登場するマフムート先生はやんちゃや悪さをした生徒から事情を聴き出すときなど生徒を呼ぶときにしばしこの呼称 oglum を使っている。拙論では英語字幕との比較考察を行ったが、英語の my son に相当するこの語は字幕に於いても状況が明らかな場合は特に訳出されないケースが見られた。
- (21) トルコ語で刑務所は hapishane であるが、この語には俗語でトイレの意味もある。ドライブインの場面ではこの直後にトイレの列にシャキル、ファトともに並ぶ場面があり、ここでも一騒動が起こる。出所したばかりのファトが hapishane に並んでいるという洒落である。

- (22) 『うっかりシャキル』に於いてはこの呼称は登場人物たちによって繰り返し用いられるものの、そのほとんどは皮肉として使われる。本文では論じていないがセウダがシャキルを誘惑する場面でも使われるが、ここでもセウダの意図はシャキルに偽造サインをさせる引き換えに家賃数年分を無料にしてもらおうハジとの「契約」あつてのことであるから、本来の意味で相手に愛情を示す意味ではない。
- (23) 平出, p.116。一人称と二人称の融合や交替の典型例を挙げるならば、大人が見知らぬ子どもに向かって「僕、どうしたの？」と声をかける場合や、時代劇のセリフになってしまうが相手に向かって「おのれ、よくも」などという場合がある。
- (24) うっかり者のシャキルを主人公に据えた作品として『うっかりシャキル』はこの一作を以って完結するが、同じくナトゥク・バイタン監督による『おろかものアプティ』（*Avanak Apti*, 1978年, 邦題は拙訳）ではケマル・スナル演じるイスタンブールの下町で生活する貧しい男アプティ（Apti）が地区を取り仕切る火薬のオスマン（Barut Osman）ことオスマン親分相手に人気歌手ネヴィン（Nevin）をめぐる激しい恋の攻防戦を繰り広げるストーリーがメインとなっており、物語の型（タイプ）として『うっかりシャキル』のシャキルとファトの騒動を拡大したモチーフが扱われていると解釈できる。火薬のオスマン役を演じたのはファト役と同じユナル・ギュレル（Ünal Gürel, 1935-2002）であり、ハジ役のアリ・シェンも下町で顔を効かせる取り立て屋の役で登場するため両作品の相似性がうかがえる。なお、『おろかものアプティ』は複数のエピソードが絡み、どんでん返しが待ち受けているコメディとして娯楽性がさらに強い作となっている。ケマル・スナルの定番役といえば何といても『やんちゃ組』にも生徒として登場する三枚目キャラクター、シャーバン（Şaban）だが、ケマル・スナルはその出演作に於いて同名の主人公を多く演じた。それぞれ別個の映画作品でありながら登場人物名が同じというのは彼が出演する作品として特徴的である。なお、ケマル・スナルは80年代も半ばを過ぎるとシャーバンないしシャキル的な喜劇のキャラクターを脱してシリアス役を演じるようになる。ケマル・スナルによるシャーバン、シャキル型の主人公が登場する「最後の」作は『ターザン・ルフク』（*Tarzan Rıfkı*, 1986年, 邦題は

タイトルのままとした) であると考えられ、この作品はナトゥク・バイタン監督の遺作となった。同作ではチャイハネで働く主人公が人違いをきっかけにギャングの騒動に巻き込まれるアクションコメディである。ケマル・スナルの役柄変化の一つの「契機」は1986年公開の『ブアと呼ばれた人』(Yoksul 邦題は拙訳) であろうか。イスタンブールのエジプシャン・バザールに近い旧市街の商業エリアを舞台に「ブア」と呼ばれた主人公が周囲の人間に翻弄され続ける姿を描いた同作品は消費社会の到来を背景にした佳品である。また消費社会の波に乗り遅れた人々の側を描いた同年公開の『貧しいお父さん』(Garip 邦題は拙訳) では養女を育てる貧しい中年男性の役を演じ、終盤で悲しみに暮れてただ涙を流す場面においてはそれまでと全く違った俳優ケマル・スナルを見せつけた。88年公開の『教師』(Öğretmen 邦題は直訳とした) では栄転によってイスタンブールで教員生活を送ることになった地方の村出身の小学校教師とその家族が直面する厳しい現実を体当たりで演じ、『やんちゃ組』シリーズから一転、教師役のケマル・スナルが話題となった。

- (25) 近年、トルコでも人々の映画館離れがすすみ、イスタンブール市内の映画館も閉館が相次いでいるが新市街イスティクラール通りには19世紀の建造物であり、20世紀に長らくシネマサロンとして用いられた建物を改装した「イスタンブール映画博物館」(İstanbul Sinema Müzesi) がある。2023年8月に筆者は当館を訪問したが、ここではトルコを代表する往年の俳優の写真やポスター、監督直筆のノートをはじめトルコ映画の歴史がわかる展示が多くなされている。さらに撮影機材をはじめ映画全般の展示解説もあり、広く映画について学ぶことができる。展示解説には英語も併記されているため旅行者も訪問しやすい。また昨年、拙論で取り上げた『やんちゃ組』シリーズの舞台となったロケ地も併せて訪問した。こちらはアジアサイドのウスキュダルの高台側の地区アルトゥニザーデ(Altunizade) にあるため観光エリアからは離れているが地下鉄が開通しているためアクセスに以前ほどの不便はなくなっている。また人気映画のロケ地であることから娯楽施設という側面が強いようだ。訪問日が日曜だったこともあり、大勢の家族連れで賑わっていた。舞台となった学校は19世紀の邸宅であり、ヨーロッパ式の建造物で

ある。建物の内部に入場することもでき、『やんちゃ組』の教室を再現した一室には映画のエピソードを再現した展示物が置かれており、これまた見学の人々で溢れていた。入り口付近ですぐに目につくのはストーブから首だけ出したギュデュック (Güdüük, 登場する生徒役の一人) のオブジェである。これだけ見ると驚くのだがハリト・アクチャテペ (Halit Akçatepe, 1938-2017) 演じるギュデュックがシリーズの中で試験中に不正行為を行う際、火のついていないストーブの中に隠れて解答のコピーを書き取ってクラスメートに手渡すという場面があり、教室に彼の姿だけが見当たらないことを不審に思ったマフムート先生によって見つかった瞬間、首だけ出した場面の再現である。なお、筆者が日本から訪問したことにはじめは若干驚きつつも温かく迎え入れてくれた両館のスタッフの方々にあらためてお礼を申し上げます。

参考文献

- 文化庁。文化庁 bunkachannel 〈文化庁はオモシロイ〉, 「映画作りの神髄 山田洋次監督」, <https://www.youtube.com>> bunkachannel, 2018年。(2023年11月3日閲覧)。
- 藤田晃代。「英語字幕の可能性とその限界 —トルコ娯楽映画からの考察—」, 『Contexture : 埼玉工業大学教養紀要第40号 (2022)』, 2023年3月。
- 橋本陽介。『物語論：基礎と応用』講談社, 2017年。
- 蓮見重彦。『映画論講義』東京大学出版会, 2008年。
- 平出正嗣。『英語と日本語の真相を探る (下) : 品詞を比較する』開拓社, 2021年。
- 今井宏平。『トルコ現代史：オスマン帝国崩壊からエルドアンの時代まで』中央公論新社, 2017年。
- 加藤幹郎。『映画館と観客の文化史』2006年初版, 中央公論新社, 2021年。
- Kemal Sunal Filmleri ve Sahneleri. *Sakar Şakir Türk Filmi | 4K ULTRA HD*. 2023年4月配信開始。 <https://www.youtube.com/watch> (2023年5月31日閲覧)。
- ケンブ・フィリップ編。『世界シネマ大事典』遠藤裕子, 大野品子, 片山奈緒美他訳, 三省堂, 2017年。
- 北村紗衣。『批評の教室—チョウのように読みハチのように書く』筑摩書房,

2021年。

鴻巣友季子。『翻訳ってなんだろう？：あの名作を訳してみる』筑摩書房，2018年。

Kurtuluş Kayalı. *Yönetmenler Çerçevesinde Türk Sineması*. İstanbul: Tezkire Yayıncılık, 2015.

Meriç Deniz ve Gordon Jones. *İngilizce Standart Sözlük*. İstanbul: Fono Yayınları, 2016. (前回の拙論に於いて一部出版社名に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。)

Murat Soydan (ed). *Türk Filmlerini Yönetmenler-I*. Saarbrücken, Almanya: Türkiye Alim Kitapları, 2016.

内藤正典。『トルコ：建国一〇〇年の自画像』岩波書店，2023年。

大村幸弘，永田雄三，内藤正典。『トルコを知るための53章』明石書店，2012年初版，2022年第3刷。

押井守。『シネマの神は細部に宿る』東京ニュース通信社，2018年。

Özkan, Bülent. *New English Dictionary*. İstanbul: Boyut Yayın Grubu, 2007.

桜木俊行。『映画で異文化体験：異文化コミュニケーション講座』近代映画社，2013年。

瀬地山角。『炎上CMでよみとくジェンダー論』光文社，2020年初版，2021年第4刷。

澁澤幸子，池澤夏樹。『イスタンブール歴史散歩』新潮社，1994年初版，2006年第9刷。

松竹，山田洋次監督。『第1作 男はつらいよ』1969年，(DVD) HDリマスター，2008年。

鳥飼久美子。『異文化コミュニケーション』岩波書店，2021年。

筒井清忠編。『昭和史講義：戦後文化史篇』(上)(下)，筑摩書房，2022年。

上野千鶴子。『映画から見える世界：観なくても楽しめるちづこ流シネマガイド』第三書館，2014年。

Wikipedi. “Natuk Baytan.” https://tr.wikipedia.org/wiki/Natuk_Baytan, (2023年12月30日閲覧)。